繪本豐臣勲功記

三編

九

繪本豊臣勲功記三編九之巻

目録

木下奇計　破糧勇磯野勢
屬久藏戰死
秀吉除二名一獲木村又藏助
屬澤井敗北

遠藤尚次殿死信長本陣

屬朝倉敗軍

安養寺演誠忠補主家威

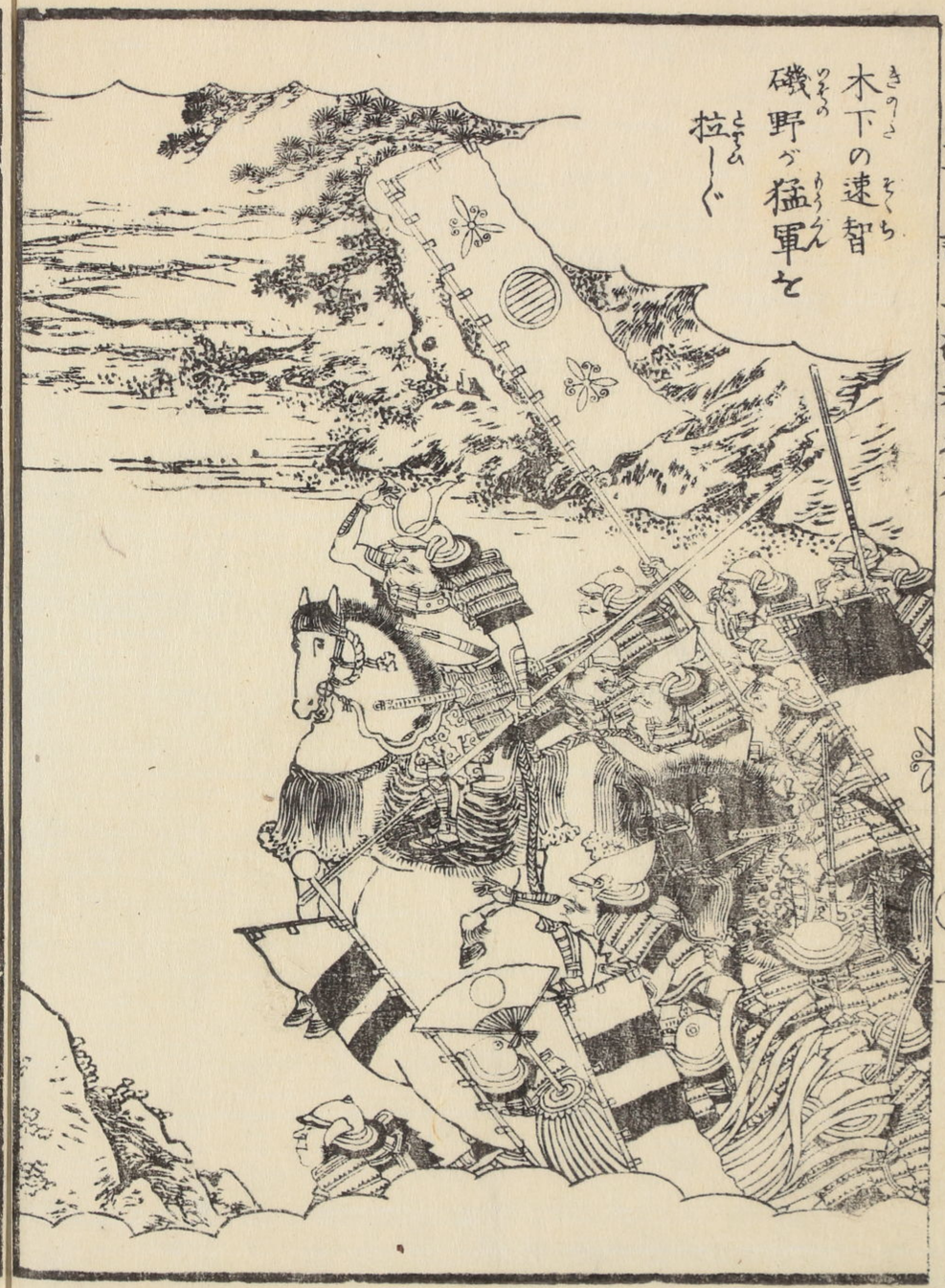
屬木下勸攻

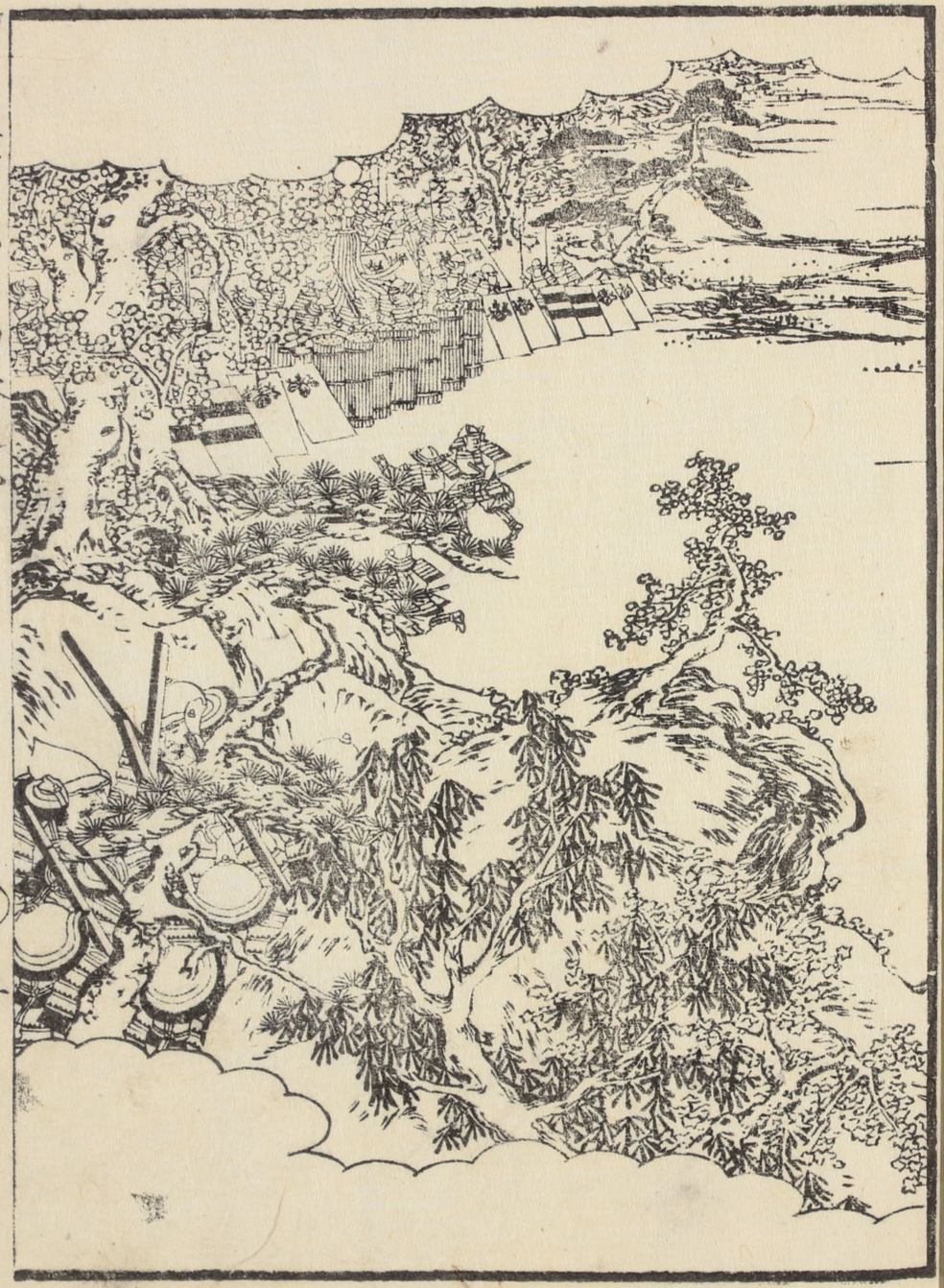
繪本豐臣勲功記三編卷之九

江戸　八功舍　德水刑神

木下奇計破猛勇磯野　屬久藏戰死

丹波も貫正。勢威さかんなる破行の儀く。織田方五隊の隊伍をば。何の苦もなく擊破る。諸本隊近く推進うり。茲小信長麾下の魁隊ハ名小員木下藤吉郎なり。謀設けし隊伍ハ。僅一千有餘人。隙疎小兵士の立並びて。如何ハも恐怖の態なりしなり。磯野が從卒ども。殘る。只一揆小破らん。ものとハ勢と侮りて。突撃ら。丹波も霧時と推留。彩ハ心得ぬ事ハこそ。今遠歟の一隊伍ハ信長麾本


木下の速智
磯野が猛軍を
拉しぐ



の魁隊なまバ大物かして警固をバ死せ。僕一千ハ見らざる勢
なり。嬉くや隊伍倭こ地ハして。嚴重なれこそ奇計あんなき。
別て此方の隊將い。織田家ハ於く。他の恐ろし猪冠者なり。
漢籍子房。蜀の孔明。そもハも劣らぬ樞機。故兒なるぞよく
實者と正さぞんバ。小猪が計策ハ踏らん。ならぞ兼忽ハ葛
ねこ了得の磯野員正も。自己が思慮ハ迷えされ。猶豫と
なして進を得ぢ。ホトこを見るよりも。そも智愛化ハ妙を
得く。察悟ぞるぞ裏將なまバ。磯野が進まぬ心を察し。
備ハこが陣の案をこるを。却く怖ろしなるべし。然ればこ
て見えぞ。隊伍そろぬ兵士ハ指揮なし。故意火急
ハ推發なバ員正のよく怪しなるも。實時ハ遽て戰ふる。

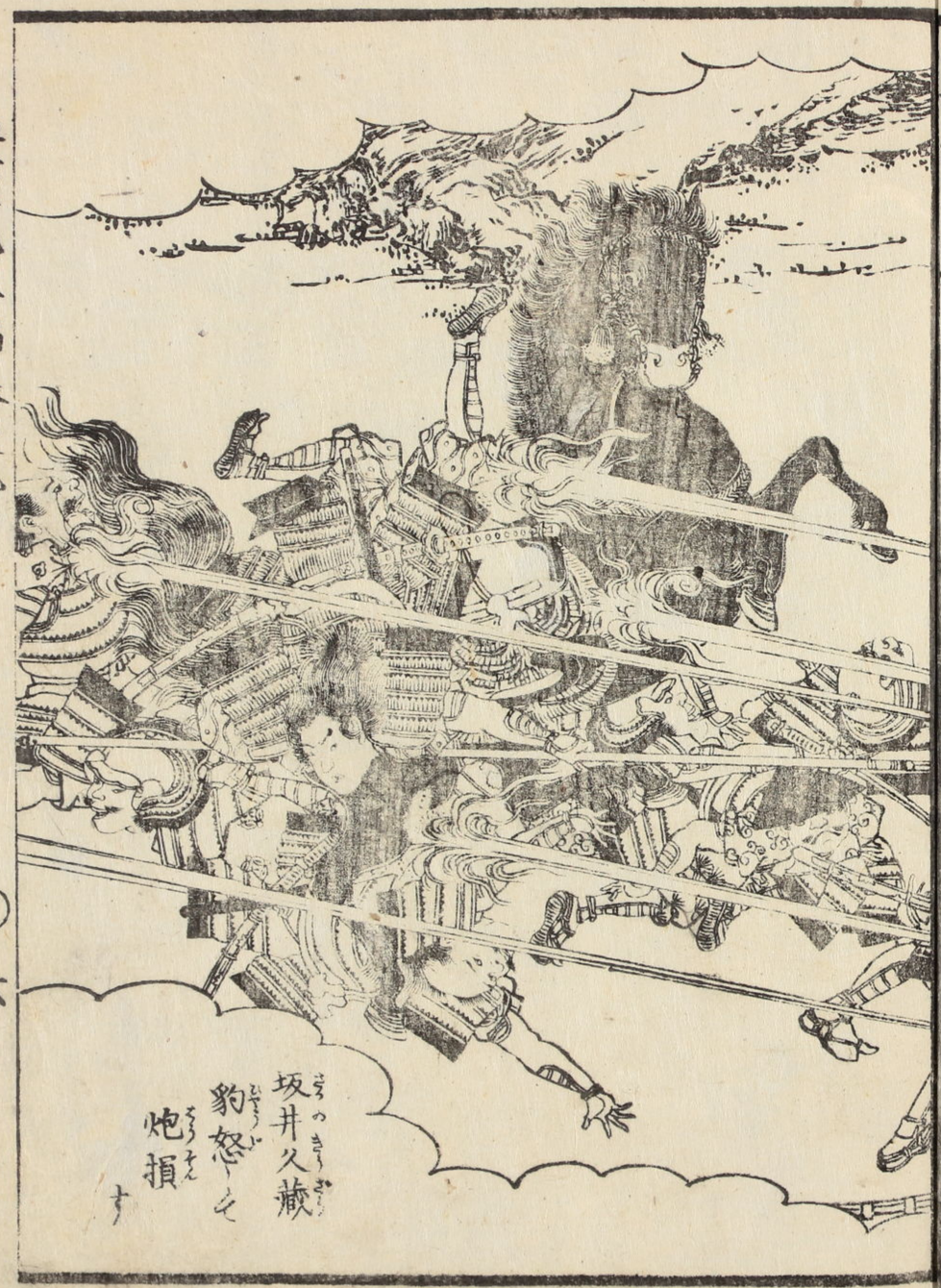
軍ぞを將ハ意ハあるこ。但なるなる磯野が兵士ハ。方僕
まで勇氣凛々ぞしも。大將員正全く。敵の隊伍ハ心
迷ふく。猶豫なしるる家ハ應ハ。こを見ハ後ふ諸士輩都く。
漸く猛威と拗がれ。動怖ぞるして見ハるふぞ。ホトハ秀吉ハ
ぞよしと。暗号の鳥筒敢つやなや。左の方より蜂須賀ハ
六。同又十郎。稲田大炊助。中村孫平次。右の方より木下ハ市郎。
加藤虎之助。福島市松。片桐助作。堀尾茂助などハ
英傑多筒の兵八百余人を正魁ハ立く。發起八百余挺
の筒先をそろへ。敢薙ると一時ハ。喊をつくして駈向ハ。磯野ハ後ふ
五千余人多筒のため隊伍を破られ。さなぐら蜂の虜と崩さ
まて。辭り羅ぐハ驚聲ぞる。中へホトハ二千余人。蜂須賀堀

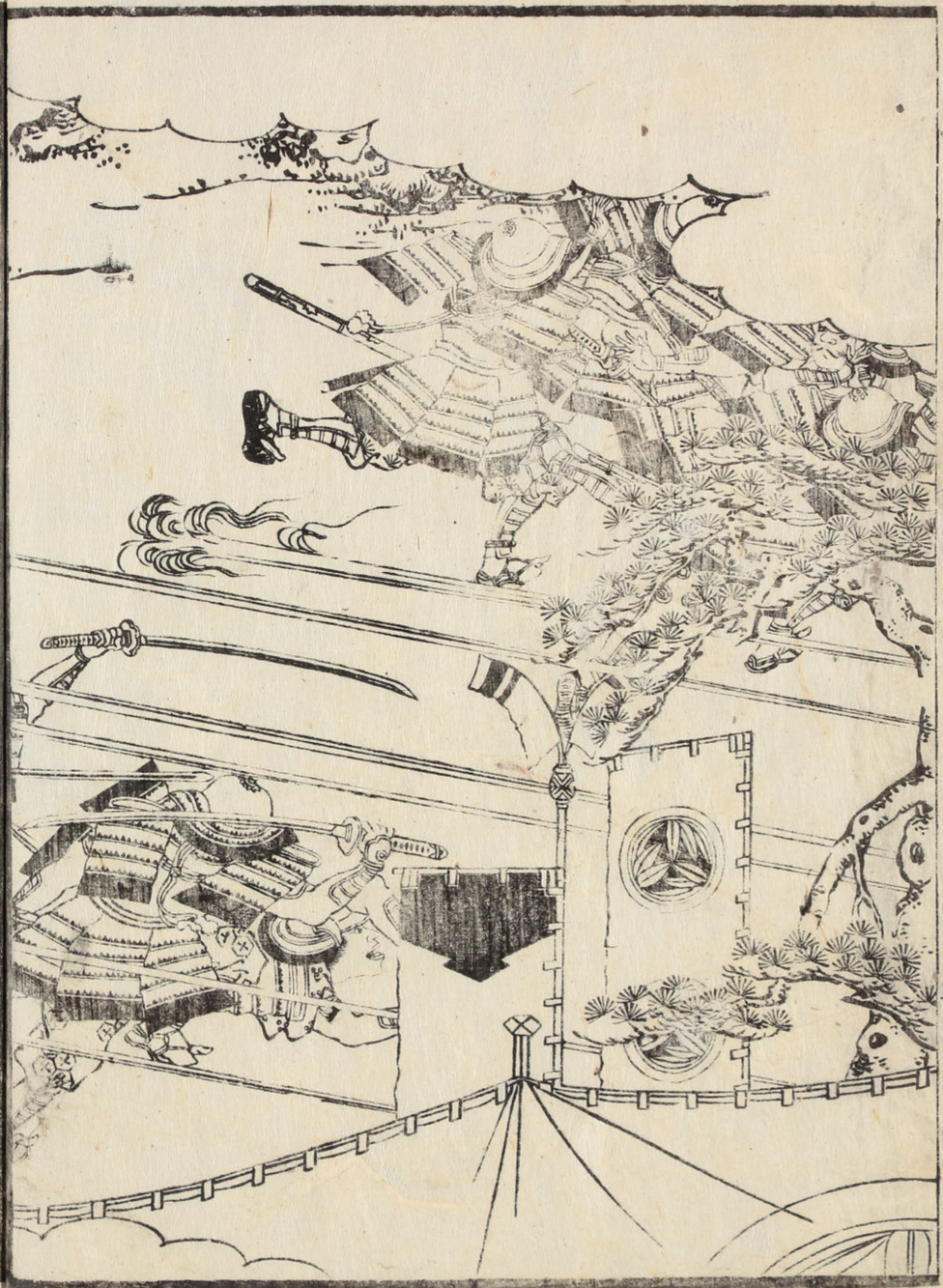
尾加藤福島一隊當千の勇士達滝推挽く之を向ひ猛烈
なる敵を左方右方より撃破まべ。なりつて揺るゞ。
宮宮赤田山崎欲。横を殿まて一遮も支潰ることなりがく。
僅くかりて引退く。磯野丹波守大小怒を遠朝に及
びて仆のとう怖まん進戰ふの外あるべからざ。些かの謀計小懼
怖まん。怒退くことやあるべ。進めくと指揮をなし。自勢と懇なる
しこを二ことを小。木下が兵小擊て薙るを。秀吉悲憂を流涙の
兵士を魅を。奥て薙る磯野勢小。大勢拾く敵をうけさを千
余人がこと方より。微塵小なさんと突起るまべ了得の磯野
丹波守も。数刻の合戰小人馬疲まそまのをなふぞ自軍の
兵士愈悲く敗走せしゝべ。員正今ハ奮力なく。後陣と一隊小

ならんのめと憾念なから退行とあと木下の兵軍越薙くく。あな
さじめとと退殿しゝなれば丹波守執く返し。一戰なしてハ引
退紀。二こ度をう退故を陽ぎ。漸く後陣小近ひくり。怒る
小淺井長政ハ先陣磯野が勝利を見く。猛勢び先きぶ
び跡小續ひて戰まんと勢猛く進をるが先魁をもまち敗軍
して逐返さるゝ小驚斷とをし。疑なの勢とをて丹波を
殺まんのとと新軍の兵士小指揮をまて而へ丹波を員正を
後。大兎小なりて退返せしゝべ。長政ことまを安途なし。軍功の
わどと賞兵しゝことと隊伍をとゝふ小。萩び進まん
とをる際もあらせぞ。木下秀吉がこと千餘騎陣列整さ
ぞ推来るを。淺井長政がこと千余騎。新隊の精兵なるのを

おらぢ。傷出せ〜〜。旗本おなじく。宛竟の勇士なり。先陣を赤尾美濃守。中島日向守。一千五百二陣は大将浅井長政。同一千五百余騎。こまゝ従ふ面々。遠藤喜右衛門浅井甚助。早川右馬允。旗本の魁隊小ぜり。磯野員人馬も病うとて後陣を援けて機ふ隙を出軍さべしと雲しさる。遠藤ぞ小浅井の魁隊。惣雄の名士軍。雲流さし撃蒐く。木下勢小弛朝ふ。秀吉欲計勇氣を量り彼と勝負を爭ふ。自軍の捩亡ゝるべし。雲時流軍を避んさめて。魁名をもつくらう小競合時舎を楽量軍名を左右へ風と引分て中を開けば浅井勢。左右の欲を回顧ぞ正面小大将信長が旗本の勢を陣く小推出さるゝとそるるも。願ふ勇と浅井

長政。自餘の隊伍小同なみぞ只旗本小弥投ぞやと烈しく指揮を傳ふるゝど小。魁隊の名士正一文字小木下が隊伍を弦通る。信長こまを御覧ぞあり。秀吉敗走せしとおなされ。旗本ぞ左右小備ふる。氏家安藤ふ指揮せられ孫吉郎を援けよと命おくらぬ。こを聞へ初度の戦ひ小敗まこらる。援井池田佐久間が倫族。芋び隊伍を立整し。長政旗本小撃て蒐まこ。森と蜂屋ハ信長の本陣小加ふるゝ。こまふよりて氏家。安藤。森。蜂屋の四将一隊小赤尾中島正中小畠を畳一揉小と戦ふを。長政もこも小弛蒐く赤尾中島と援ふんと推出ぞ左右ふ。佐久間右馬尉。池田備之郎弦出く。遮面め斬截んこそ接ぐふる。駆ぞも二ぞ双の長政まこ


坂井久藏
豹怒ッそ
炮損す



べこまを彼の敵と組ともせども。弦散さんと諸士と懲し勝成猛く戰ふなりかも。遠藤表右衛門淺井甚助。今日は軍の敗れなば再び活く歸らじ切腹と覺悟を頼く極めされば余隙なく相移り甲死狂ふ様て廻るその勇猛のもるゝ縛火と燃る斧小勢奮戰う。池田坂井の軍兵軍。遠両勇士小敵ばかりと思へるかそ坂井右近同久藏。細の軍ふうち輪もとゆゝ念ふなりひし百八方使ふ甚右衛門甚助。掛起られうう真恨。骨隨小徹して抗憾ひまは鬼神ふもせよ神さじと一喝叫んで長政が旗本に隊伍へ蟇地小弛投。自信の兵士目も屬を長政とそし決當。老黨ゝ五六十騎前後左右小率列ね操駆ふ〳〵ゝるなふも嬌子久藏成重傑氣怪勇士少年士なまば。誰渠ふも劣りはせじと正魁小弦投るゝ。あまり深入〳〵ゝるを〳〵父子の際を隔らま。續く自軍ハ單騎もなし。然ども徒せど四囲を驍使斬仆く羅倒し。戴多の敵を弦破も遂小大將長政。馬前近くそ進ゝ侍を。果川右馬元敵と戰く。憲肝ゝ元小冠者うゝ。子摘小せんと馬弦憑。揲合ふて戰ひるふ久藏生年十五歳四尺小充ざる童形なれども勇猛のること第丈も敵せど。ゝまゝ〳〵めふ果川も。懼怖まて怯む而と。久藏遽さそ斬落ゝ。終小藏とそ捉ゝ。馬を跳らせ進まんとを。遠嗚響碧ふ士輩。憲小童と侮て。近づ侍〳〵ば過めらん。奇怪ふて擊縮めよと二三十捉箭頭ゝ〳〵久藏目當ゝ擊起まば。ゝ〳〵ゝ〳〵て墮ゝ。強ゝる馬の馨首

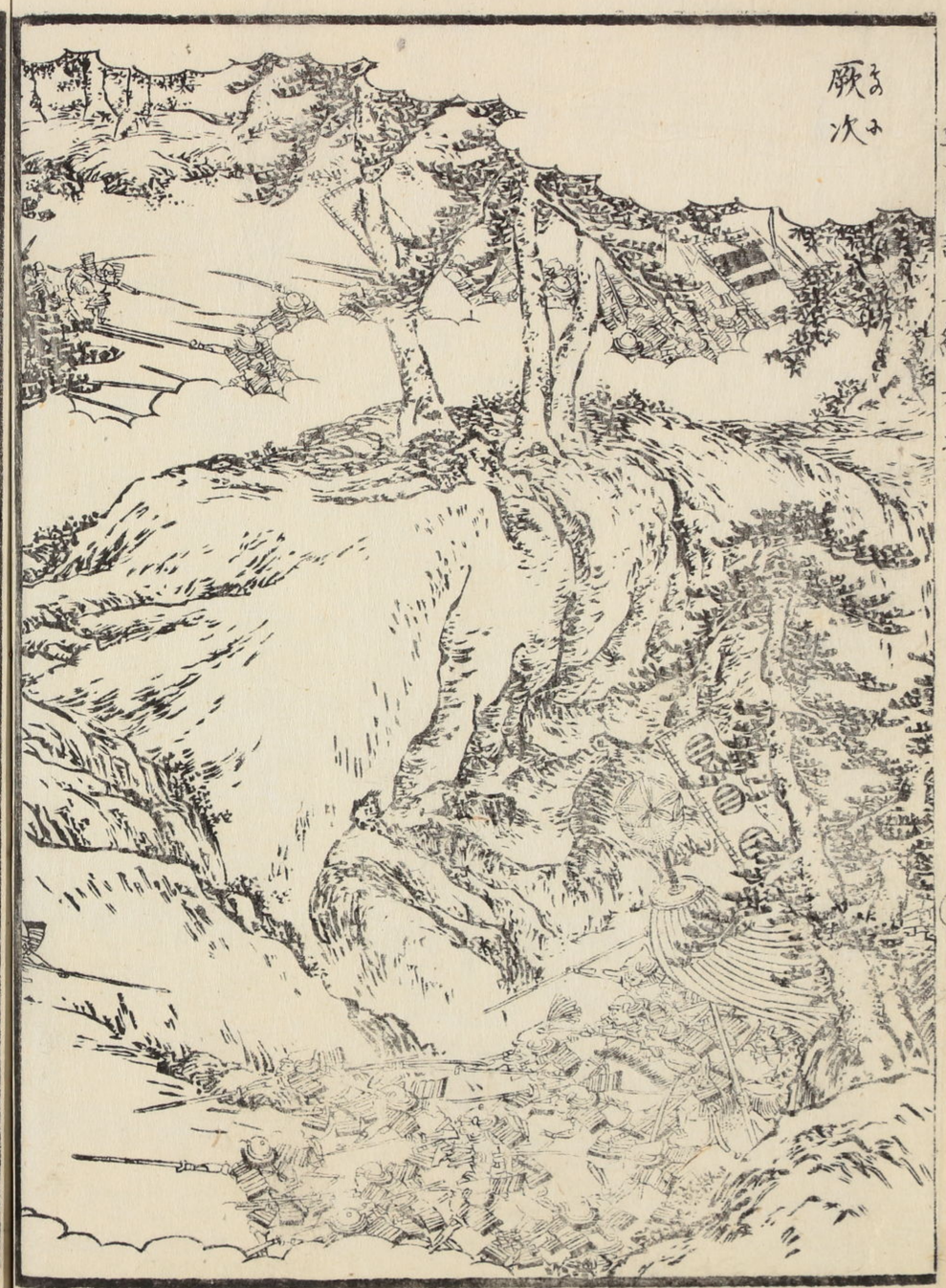
小。院四五騎ばかりにて、馬に厩風を倒さゞ傳く。こゝもとも小傾る而を清井の名士軍。壁ゲ上小打重り。久義成重と毅捉う。喰呼搦る遠少年武者。其小劣らぬ英傑なりしゲ。天運淡薄なるとして。孰軍のうち小戰死せし事。悼まるも猶剣とあり。遠呼坂井股弦の老黨沼田半兵衛。奥深名部久義草踏歌陣へ。深入せしと発思く。呼返さんと義兼を大勢に歌小遮らを。右翼左崩の揮して。漸く尋當こうしゲ。首こそ獲とるも。悔嘆ひて死憤と叫し。周ドく敵中小斬く投。おもひの傳小血戰なし。歌名歳多討捉く。両人とも小戰没しゲ。其の右を政尚ハこまと美ふも知らざるゲ。清井掃部。同半助。黒井藤五郎傳と對歌なし。陽陰小なりて聞ふなりしゲ。自子久義長政の隙小戰死なせしと聞くも。怨恨殘きこゝもとも嘆死。孰も狂孰の傳くふ。一個の愛子を失て。伽と頼情小長生へん。いそく僧小戰死せんと憤恨小髭須髮も逆立て。晃を貫く威勢ふく。弦出さんとなるを。老黨なりける坂井十助。書面小孰繼り。こを御嘆息ハ孰ことなぐら。軍の揚員ハ聞ゲ譯らゞ。御子息戰死し玉ふとも。自方小益なる死を急ゲるい君へ對して不忠なるべし。刹や死しる久藏力孫の。御昂ふもなるべらゞ。未練の汚名と業なふ。唯々一命を全くしなひ軍に勝利とおがしめをこそ。孰要なると諫もるかどに。政尚も主理小責られ。猶嘆しるを。十助猶も発踏りもるべ。書と把く奉起く。こを躰小後陣へ退をり。孰る

小淺井備前守は、魁軍と隊伍を乱とつかし。信長の旗本へ殺らんと惜るを佐久間池田の両將、前面を斷てさへ戰ふ然ども衆小遠藤右衛門。淺井甲助の面人、八方を塵埃小拠く。猛虎の像く異起るが如ぞ。佐久間が諸卒散乱して。池田が陣頭へ薙倒るを。長政よく驍将諸士と指揮して進む機會なるを。磯野丹波守まさと再び二千余人ゆて推出し。自軍を援く盛を奈ぞ。然るか木下為言郎は。淺井が魁軍の怒氣を避んと右へ退てあり。長政が諸士か指揮なし。進停を得るよりも。板意自勢を遠く退け。必勝の圖を窺ひ。後陣小主し磯野員正。若び出陣なし。池田佐久間が隊伍の乱れ。戰ひ危く。なりれば。木下為言郎は。淺井が陣背へ推廻し。二千余騎を一隊小合せ。旗本勢と磯野が勢が際畔を割く。蔓地小殺投多流稠く。数千蔓ぐ磯野員正。こを看く。急小自勢を纏貫し。木下勢と遮へ。尚め。藤本勢と敗らせまじと。奥小ぐ突て蔓る。秀吉頭て殺しこまぐ。即時小自勢を二隊ゆ。新分。淺井の背と磯野が面を。挟撃小て。数年屈め。虚間を窺ひ。破らんと。隊伍を繁さを攻蔓こう。

秀吉孫兵衛獲木村又藤助 屬淺井敗北

豊君の命運實小天小任せ。向ふ所獲ぐんば。遂小軍を返して事なし。然まば木下藤吉郎。淺井が隊伍の背へまろ。斬こう

織田浅井
三田村道
大合戰


厥次

さんとなしるを磯野丹波守二千余騎ふて出来る。暫び未下と突掛る。備又東の一方少い大将信長の籠むと。浅井方の先陣。と火水の像く戦ふる。こを又次の一場ふい池田佐久間が両隊と大将長政が旗本と。奥味んで挑合ふ。備を洗い未下野を。こ千餘騎を二隊こ色し。東は一隊い長政が後陣ふ喫者戦つが。西の一隊い丹波ちが前隊ふ冲投ふ。彩の如く。こ場の合戦。歌隙およそ十餘町。号鏡の音喊の声寸合及音の活に石見織田淺井家の家亡。這一戦ふあを と見ふく。凛く哀もまと怖し。中ふも磯野丹波ちい最前未下との戦ひふ敗走れしを憐念ふおひ。その和睦をば雪がんと憤怒の勇を顕しそ。ちづふ繰ふ銃長ふ撞綿。正魁ふ

進んで戦つば未下方の勇士達已を劣らじと競薙。ふ中ふ猛者観い加藤。福島。行柄。塙尾。蜂須賀なんど面く数像ふ繰ふ把。刃い塵毛より軽ふ色。名い金玉より重んじそ。此場を当途と戦ふ中ふ加藤虎之助清正い他ふ優れし功をみさんと馬を先頭ふ跳弾せ。良歌名の用ふ當をば面背ふ是の嫌ひなく。鴉仕雑ふ敢仕。猛威をきをめて狂旋こを。老黨井上大九郎。危き事ふおひ。加藤が書の傷ふ率副をと佐く勇戦しふる。備を磯野が隊仕のうちより。秋聖弥右郎。上村彩吾。宮本長次郎。飯田覚兵衛。鳥田権右衛門ふ。こを夫。鳥田権右衛門ふ。武士。貪是一騎當千ふる。五百有餘騎を。ふらべ小山の崩壊ふ。像く。秀吉目當ふく狂来ふ甚。蜂蔵い只単ふ藤吉

帝と殿の外。余念なくぞ見えける。遠嶋秀吉の馬前ふ
る生憎従兵ら散して。僅の兵士のみ五百余人の
強敵ふ。掬起られて能戦ぐを藤吉郎が陽色ふ動く。
木下小市郎。中村弥助。真木勘兵衛。浅野彌兵衛。藤井
又右衛門。他出迎へ暫時がなど戦ひしが。敵兵は猛威
鋭くまとがこまとらも遂ふ敵しぐく。動めく起と丹波守。顧や
遠隊ハ猪風なるぞ。進めくと諸士を烈まじ大勢一度ふ攻起
くば。木下勢いよく四面ふ散和たるを。加藤左衛遥ふ見て。
の像く純孝う自軍を助けく磯野勢を。こ四遣わど追久
を秀吉こをふ嘉力を得く。こうら強を歩揮く。一世の大事
を諸勢を懲まし血眼ふなりて相戦ふ然ども磯野が軍兵ハ。

必死と覚朝を決しこまとべ掬ども撃ども強とも せど。当進不退ふ
揮きくるを四へ木下が隊仕剛猛なるを。如何ふも小勢なるを。
再び磯野ふ退起らを。既ふ崩きんとする雷へ忽然として
磯野が備。背面の方より亂起。天徳地前して蜂蠆る。他軍
も自軍も一様ふ。底事ふやと思くあるべ。その矛の大けハ六尺
ふ。猪こ四すも言く。覚へく。大張勇猛の偉漢。後者とも異せ
ぞ只単個木綿弟りておどしこる。黒紋猛と漆毫ふ被覆。桃形
の兜を背上へ投去。柄巻を用ひど巨障を覆げ。遮る敵を悉
く。肩擦曝拡つむふ信せ。磯流こと人。磯。抱若らきてこを
打あきべ。こをふ当て肩をうつあり。或ハ馬の足を塞き。深田
へ逆黙ふ立もあり。その強勇の猛きこと。理ふ白眼もて猛

木村又蔵ク鋏拳浅井勢ヲ敗ル

立ちる素羅延神の出現して。魔界を暴るゞ像くありて得
ず繞りし磯野勢もこまゝ敵たる事あるまでも中を開ひて
通しるゞ。彼大漢を遠隔位を。穿徹氣色もなく。ホト
勢ゝ加たりて。磯野ゞ魁を拋例く虎噴をなして揮き
しゝ。磯野ゞ老黨上村新吾。宮本長次郎。これを見て。
憶大猛なり走軍して。孰奴をまで彩まで。自軍に兵士を
嬪るぞ。搬止まんと二騎乗しく。陰綽驚して馬弦傷。唯
一隅ゝと下搬ゝ。突出しる右の陰の。血頸楚と撃接へ。
力信せゝ便操まば。上村新宮ハ陰ゝ抜まて馬より撞
と墮らしを。起しもそを揺く割仕せ。首拉次て縷ゝ結
岩新吾ゞ馬ゝ飄流と靠星を操奪る陰搖舒峨と一隅
馬ゝ掬き縦横に障ゝ搬已。陰馬の方術鬼神の像く夫
物も彩やと見るもゝ弱馬武者と繞搬落ると秋毛
ゝ吉郎大怒り。法の暴士判止くまんと。愚て毒時戦
ひしゞいでう是ゝ敵しゝ得へん。偶まじのと逐ると暫秋毛
ゞ獲の革鎧ゝ隻手撮ると見くしりしゞ中ゝ提げ首搖次。
なりも猛威の體ぞんみと異ゝあまてを弦巳まば傷風のし
磯野勢。勇士と多く殺まし田へ。家も魂も失ふ。散ふ
ゝて亂起。木下秀吉最前より。這操きと見贅して。奇兵
の思ひと〻しるゞ自軍を佐し。那勇士殿を撞へと指
揮をるかどに。加藤福嶋片桐堀尾蜂須賀稲田俄。これ
魁ゝと揺起く攘きしゝ。遂ゝ磯野ゞ二千余騎紛こして。

敗走せし員正一個怒り罵り名士を懲まし戰さんとすれども共
朝義り偏みまこと達整せざれば術もなく退うん事の杳憾さ
小戰死せんとおもひしが主人長政魁軍小ありて合戰最中の
至るを〳〵おもひ佐助んと横行小織田の隊伍を弦通り長
政の隊へ馳加る。彼大漢いなを倦ぞ磯野が殘兵を退散の
し。四角八面小撥起りを起火水小なまと傑戰なす。秀吉
ますます感佩なし。渠いろなるなまべ斯量小自軍を援ら
そや。渠を招ひて對面せし。と軍使小命じて呼しもるかの
偉漢を磯野が老黨浮田權右衛門と戰ふ〳〵木下が軍
使馬を馳傳耳傷近く大声あげ。遠小自軍を佐助ら勇
士。怖くい足小の姓名報じらるべ。浮大漢島田

權右衛門と戰ひながら小居い加藤虎之助が家臣小おわく木村
又義と稱せるあり。戰場中の礼禮を御免と答詞撓ま
ず移激言て遂小島田を撥貫く首撥ぶく立ちし。怖
しくもまこと驚めしらるを。以上ここ級のよく藏携へ木下の陣へ退て
曰く。然るに木下の使番い其姓名を聞よりてやく木村浮田が傷
員も視決を。近りて彩と若しらば。秀吉備い弟来。虎之助と
仍来せし。壯士小ありつるよる。高代の勇士のうるもと或い惰き
或い感し。清正小彩と若るい小ぞ。虎之助大い驚び。備く信義
の武士なり。先俳来りひたんとて。馬を跳せく疾行。木村又
藏大張なりるを。今日孔勇戰感ぞるい小なを割ひもあり。是小
よりて加藤清正。出近ふて虎小まと声うみらまて又藏も。

馬より飄流と跳でゝり。奉公翁の御當主宜小澄く斬まゐ
做果せい御賢らざしおくるべしと殿捉し藏を加藤小揲せだ。
清正まもなく號泣び徒帰りて本下小謁せしむ。羅吉郎馬ろ
都に對面ず。穏く前日虎之助が門譚少て所つるが御と遥へ
ぬ信義とゆひ旦今日の戦風。秀吉殆感嘆せり。這戦場へも
なのこしに。乗りしぞやと訊まべ。木村又藏鳧を縋ぎ。嗚ぜ縋き
小居先小慮らざも。加藤刀祢の恩義を蒙り。這君ゆくべへと
恩諸。佐ゆまらんと約せしうぞも。老母の病氣ゆ抱のこめ。一端い
別を帰りしが。こ日已前小母も身罷を。孝の終をの事ゆ
を。切く七日と吊ひて得。然して桑向つまらんと思ふ樣
ら今日の合戦。御大事と羅所。彩る時節小乗り合らべ故

小も男子四人の供養小も。戦功として歓ぜゆべ。一枝の
花小も惜らんり結と思起ゝ取りたもれ殿を。純忠をゞて
や合戦最中を人を尋ぬる暇なく。直小鉦投徹力と竭し。
後の藏と捉得らし小身小餘る所藏小頼り。恐惶てひと重し
あらまゝ羅吉郎。搖迫しく感佩して。實小頼怙ある勇士ろ
ゆ。這合戦の收まらべまもしく恩賞もゞ兄ありと大小賞翫せ
らまられば。虎之助も陳謝ゆ。我殿黨小過分
ゆうと謙遜こと和と方ゆうゞ。井上大九郎も又義が勇戦と見
て惜死感し。羅吉郎明友の契ひとをゝ丈ハ闇き淺井備前守
長政ハ。池田佐久間が陣江を蒐崩し。猶進まんとまる本小張の
方より木下勝。単騎急小寄捉ゝ。驚死ぐらも這歓を陽ぐこ

と稍半時。勝る小磯野敗軍を見へく。敵は提灯所えし由へ。
淺井の兵士勇氣猶そ戰ひ発し。因永先陣中島赤尾へ。
信長の旗本勢と血戰なせしが。敵も敵なれど勝越らく。今日を朝と挑合。信長素より性急なれ
ど。猶後の利を屬ざるを。大小鑓燦く背面隊伍明智お田小
指揮なして。横槍いまとなるを。瞬時ぞふと光秀利家。二
千余騎小くた右より。淺井が魁軍小撃る。氏家安藤
まちく懲を。息も續で攻起る。敵方へ稲葉伊豫守。
都方小助勢して。別余勢へ向ひしが。後陣小立く軍小進む。
合戰せざるを稲葉小おもひ。信長の隊へ馳迫り。淺井の魁隊
へ余釋もなく。こを二つを小輕半てうり。殺辛で懲ましせめ戰ふ。

稲葉ハ原来ハ美濃ニ人。張の主中小も武勇小秀し猛將なる
べ。こづうり槍を追繰く。敵起ふく。正魁小馳投る由へ長家の
面くこまもくとを小おくまで戰ひるが。前田昭智の助勢ハ。
こまを小まもく軍威を添。戰を勇して揉起る中。赤尾の軍
兵衆。何うハしてなるべ。右小殺を左ゑ撃を。間者小成と
頼嗤。散く小来うて敗小しなれば。こを為小長政の旗本勢
推起らをてこも崩小。是紙を乗ぜぞ散乱して。恐山明こぞうり
こうる。織田勢のもく猶小素。潮の波を巻ぐ像く。大軍一度小
攻起るるぞ。大將長政驚斷をし。自軍の隊伍を達なか
さんを。圓拵て指揮をる而へ。朝倉勢も敗を。と見へ右顧た
例小退ぞるを。淺井の兵们今るを。こを魂も小傷ぞ。

恥も忠義もうち忘れ。先軍ふく敗走し。追撃せらるる軍員と知るべし。長政憤怒ふ怒ぐるく戦死せんとありしを。老臣微力ふ諫め。辛理ふ撃を退くる。磯野丹波守員正ハ此ふ乗りて殺さんとせしをも。自軍ハ既ふ抱心崩こなり。防戦せんべ方術もなきべ。五百の自勢をうち纏め殿弱なるを。若城ふ。佐和山ふ帰くべ。退行る。織田勢十分ふ勝利を得しべ各驍勇鋭合殿撫ところの馘級を。こもくと本陣ふ持出。大将の實撿ふ備へんと祇候せしこそ驍まし

遠藤尚次撃二死信長本陣一屬朝倉敗軍

扨て家を依らんとせしべ李冠兎履の例あり。亡武名を全ふせしべ。雖意ふ勇の誹を彼る。敵ふ軍ハ猛ぞんべ。忠功金ふ成る。偉あこそ。強ふ浅井家の謀士遠藤喜右衛門尚次ハ。今日自軍猛利を得く。信長を殿べ。好生ぞべ。備ふ自軍敗北せべ。戦死の外他事なし。と稍く覺悟を極めし事。扨。今朝より長政の譴責ふあり。自軍怠慢崩と。なりるを。恨く。栖家ハ死ぞべ。と即時ふ覺悟。涙を流て滿面を深淋ふし。鬢を釋て素掛。自軍の武士の戦死馘を隻手ふ提げ。出て。紀軍のうちを實説。織田家ふ強辛ふ紛雑く。織田家ふ諸士ふ。もくと捕る馘を抱出く。大将の實撿ふ備へんとす。是を見るより喜右衛門得ふ諸士の群ふうち雑う。

遠藤喜右衛門
信長の目前を
殴殺す

信長の御傷をく覘ひ進。旁僕ハ殿んと計りなり。彈正忠信長ハ勝利ハ心驕く慢と深凡ハ寄る。吟く紙と集る法士の戰功を賞義し。余多も来せざ在を而へ壹番者を殿様ハ高声をとゝけて。亭代の曲者を殿様ハ遠藤實検ハ備へん。と呼たりなゞら進をる。仔中半を雲脚と視く身久作ハ同道せしゝ。狀義意て久作重友宗と壹騎にて来たつが。面前ハ三塞り。こゝ前こまへと謂せもてざこまい緣故を戰ハ直ハ言ハつるつらんと通らんとをるを尚も遮り。さて こそ好軍適をるゞと跳躍て。西畠と組んゞら。喜右衛門を倣損じる欲嘘朽憾やと一声呼び拔くる藏を信長へ。攘他と拠居久作と姑く揉合力戰しるゞ。遠藤弄奪

尚僕ハ今朝より數度の戰ひハ五體全く倦果これど只一男紀のゝ刻ゝくして大將信長と殿んの社ことまで殿ひとゞきしゝども久作も大力の勇士なまバ難ゝく遠藤を捉て引傍前搖攻く指上るハゞ。信長大小感ゞたまひ行中久作微せ予稿ハ花ふくるべきハ。蛍くも屬同しの社ゝ。感悦しゝ多ひる。慈る所ハ御加勢ゝ。歳多の藏級執りを提軍を新るせう。今朝同時ハ小軍馬を費し。五千余人ゝ隊ハ分。姉川當く推出し。朝倉勢と合戰しるゞ。大將頭く計後を殺け。敵を切而ハ編拔んと傳えぬ慈ゝ。けて。故意四五町退せゝ多へバ。朝倉の諸勢勝ハ来て息をも續ぎ逐来る。おゝ圖ハ敵を引拔。三千余騎を左右ゝ殿せ。

真柄
十郎左衛門
姉川ゟ
討死

二千餘騎を正面より一度小吐と引退し。二方一時小接起る。敵の大勢遠ふも引得ず。宛汲岩小臨るが如く。御加勢の陣前間を。つゝりかけらるゝ中へ右側大倒小崩れ。時小死人の山と成る。彩倉の大将孫三郎元健も孤軍の中小捕巻る。孫小発くる所を。朝倉家の勇将真柄十郎左衛門小國二双の大力小て。義文不當の猛勇なるゞ五尺三寸計もある大太刀をふり興し。鬼神の像く小異ふ。其子十蔵もろとも小殿投てはゝ。自軍も十分勝利なり。御心寧く支へべしと。詞雖ども泊伸しなり。柄十郎左衛門今程信長と聞しめし。強く大悦あり。まづ惣軍小命ぜられ。捷鬨を揚させ。諸士と一所小聚めらる。御加勢小も程なく帰陣ましく。信長殿小称歎

あり。最懇切小饗應せらる。魁して後小捕る。敵を実検ましく。と命せあり。浅井彩倉家の戦死将卒の敵を都筆まで。二千二百余級小覽べり。自軍も一千有余人戦死ありと記れ。近代未聞の大合戦なり。殊小敵好の信長も嘆息ましておはしなるゞ。彩倉氏の敵級なれば。良敵将の敵と思ひまどゝ雖名分明ならざるあり。活捉の敵士を呼く。洋小せんとおし。めさま。誰ぞあると命ある機会なり。茲小浅井の長居安藤寺と命ある左衛門尉の旗本小立く。諸軍小指揮なり生ぶるこゝ。自軍惣崩るゝ。へ。君長政と藤さん。と踏止く戦ひしを。雲霞は傳き織田勢小取後左右く捉鑓らまで。遁出る小道なし。元亀元年へ続九。花束ありて安吉寺ゞ

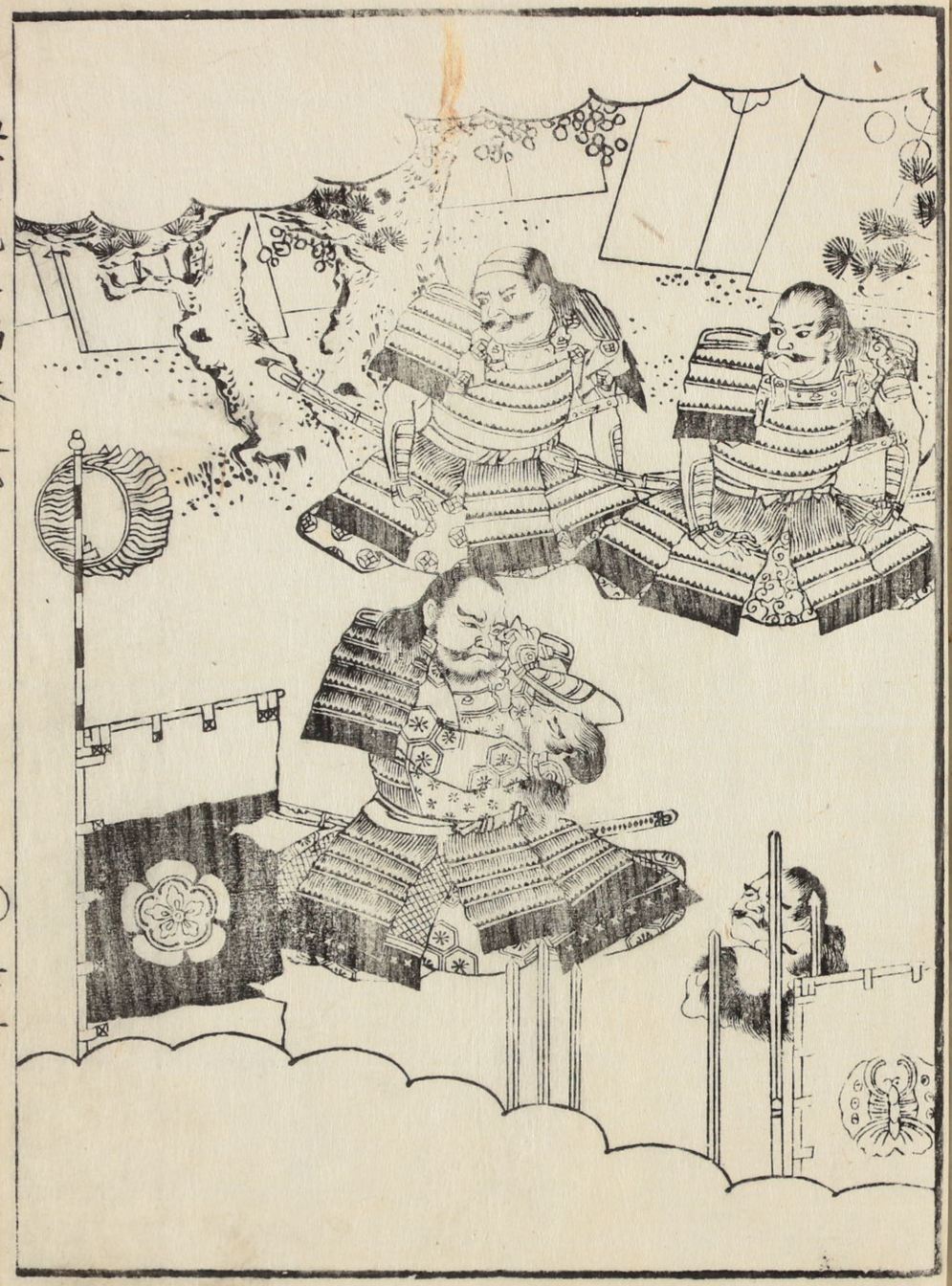
臆さる馬ハ當りしく怨恨ハ撞と墜こしを。織田勝義多折帝ち
て遂ハ活捉返りしかをもち遂趣を言ハを。織田敗路悦び
玉ひ。顧ちと紀武士を捕へさり。こ郎左衛門ハ手紀已なをべ早く呂
伴来るべし。親同をべ紀詔あり。公士ハ命じて安養寺を信長
の御前へ出さまけり

安養寺演忠誠補を家威屬木下動攻

窮るハ陳こて屈せざるハ奥社大事と謂へべし。然べ安養寺こ郎
左衛門縄世ハ淺井家ハ世双の勇士なまども。運命ハ朝をる
所ハや。遂ハ擒虜の身となりて。織田殿の御前へ呼出さる。信長
をまを御覧あり。こづら郷を解せられ。捺を近く招ぎ玉ひ
手長政と縁者あることを見海が料理をしハ器をも合

戦ハ及ぶ事。私の為を所ハあらず。天下萬民のこめをおもひ公
方の命令を蒙りて。朝倉義景の無礼を懲を紀をハ長政これを
憤り。遠遣別心せらるく条顧居こて紀る事を。伊こて諦め給
さるや。這朝ハ暫ひて悔ども返ども。手海を助けんハ手雑作紀
厚をべ紀や。いくばくをこと命せらるを。こ郎左衛門業所厚き御芳
志有がをこを。こ郎左衛門ハ君の御家人ありて。敵ハ捕をを命じて。
敵家ハ隨ひ仕へなば君ハいくばくおしめをそや。是をもつて長政
の心を御察し玉ふべ。こ郎左衛門が才ハ窮りをせべとて。二君ハ仕
ふる事なし。又長政の絶好を。謙めざるゆへあぶざれども老を久設
強情ハしを。心懸を守る心深く。ふをこて父ハ背紀がをく。居とて君ハ
弟ひがをき道をとりつく。休ことを得を紀ハ紀ハ。此上ハ只ハ子ハ死を

龍ケ鼻の本陣ゆ
安養寺三郎左
衛門遠藤ゞ饌を
視く歎息す



賜ることを厚くなりたると賞ずるを信長聞て。大張浅井の忠臣
なるを惜むもあらんと存ぜしうども。武士に賞ずるを方便なる事に
き剛の別ふあり。今日殿捉しの職のうちに姓名知ざる勇士あり。
警び敵ふもせよ。忠死を遂ずる英雄と謂べし。武士の職と奇一に空しく
捨んも本意にあらざる。能く視て名を付よと近士に命じて今
明るまぬ職級おもき持出させ。安養寺に見せしめられば名当名と
記しうる。末後に及んで久作が。捧捉得るあやしき職を携出
きたると持出たる。こ身右衛門見看るより。潸然として落涙
叶信はしや浅井家の運。たゆ既に極りぬ。是ぞ浅井の謀士と頼
し。遠藤喜右衛門が職なりける。彼る後亡の理を察し。先年若と
長政と翻く佐和山に舎せしに機舎に兵右衛門頻に主人を勧

め若を殺んと計ることなども。久政長政兼諾せざるを非義こ
遺に。断親の義を貫く制し。縦令朝倉は肯くとも若に随ひ
まゐらせずば家全うしと諫しうども。久政更に用ひずまだ戦
ふく利なる事を解用ず。敵に敗戦死
と決せしうる。若右衛門戦死せしうへ。長政を補佐すべき。倫族の
外に外なしこなりへ。悲愛まことに深ぶ思ふも死を忍ぶ楽に退
若こふ存ぜまば。枝く首をめさまと謂に信長に悲涙とうめ。
備に名に負ふ若右衛門なるう。怯勇士の戦死せしも。是久政が義情
也へなり。久作もまこと存外の良職捉しの社なりとて。屢賞ぜ
られてのち再び安養寺に向はせ。多ひ是より直に小谷へ推参。
此度に参じて城んとなりへ汝が不存ぬいかぞやと訊ふ

こと命を惜まず。軍議をこらしてうち笑ひ。淺井はとめ死を急ぐ。世ふ聞らぬ小子へ軍の進退を問ふ。偉。近衆衆の所詞のち だや。然し所存を言上せぬも徒なるふ似これば。猛義なるし。君の賢意多くいこを長政敗軍せし事也へ遠勝ひふ・祭し玉ひ直地ふ谷へ推進く。系取らんおかしめ。べられども。恐らくは御得利あるべし。且今日北御勝利まで無ふなる事の出来らん欲。其故怠慢とこを推ふ。今日の軍ふ長政こと。敗軍つまりはへども。久政は遠謀の意あり。張孫の勇士こと不余人遠倣とふ谷を固めこを大軍ふて進こ多ふとも。切悔くこ事なるらん。剱や小谷は要塞ふ激せり。兵糧兵丸も不足なけこば。容易落城せ固じきのを。君の軍兵大勝なきども。

尋常ならぬ大合戦して。諸勝傾労を極めこば軍事の用ふ遠づれ多く。あるこもあり。恩こ殊更極暑の天氣ふ冒さ。ひらで欲自由の攘なきんや。国兵百姓ありこめども。怖る事なしこと兵所。ふ居備へこ無事ふ逆らば。回主久政の強兵とり向く。今宵御陣へ夜襲ひし。君の大軍と徽塵ふ戦へ。長政ふも此意腐が最先御事なるぞや。且こ切の両こ日も遠所ふ深留ひしなさば。朝倉義景の形こを来らん。こきらの強兵を増副へ淺井勢倉諜し合せく落び合戦ふ及びなば。是まこ君の御軍猪利あらん事おなつるし。愚見頑生ふ般なまども軍意ハ大将ふ御心ふあるべ。こを遠上ふ御尋ひこ用着を剣らまこ。ひへと云諺陶くこして悍る色なく。添刪ならぬ理を深まこば信

長と形ちなご御感あり。汝が詞至極の理なり。手が心小解傳ひぬれば。一應軍を帰さんと。汝小もまた四郎あまべ助けて帰さしむべき間。しばらく人長政と能補佐て。再び忠戦を懲むべしと義をなして遣還さしめらる。世小伝長などの軍憲たるべき大将なまども。心小独裁と抱くべ。小獲心ならぬ倫軍小。詞を訓て吉凶を試る術。遭ひなましが今天も知まで大合戦し。十分の勝利を得ることなまこと。勇気氣熾小有なべら。安養寺が詞小逐ひ忽地勇躍を抓がれ心と決して帰陣をべしとき趣を絢させるふ遠胸未下藤吉郎い清井敷軍をとめ。ぞも。固断いならじと猶も念絡く。殊会軍城悲く。敵地遥小趨散し。自軍のうち小紛き立りやもぬらんと遂小小ちまを穿鑿なし。御旗本の騎卒們まで。隈なく尋後左

ちる。本陣への参向遅かりしぞ。敵く出今参陣し。定めて直地小小谷城へ推進せるまふ事なるん。と疑惑を見まべ将卒悟小後くして進む總なし。秀吉要小相遣しられば。慌て帰参へ伺公備なるうち。密く進発しらるふべし。君は勇猛を頼ひ恐ふい。今遠胸めて出なう。そや怠くと動むまどる。信長い苦英なし。小小なる汝が詞。勇小惰るい底事ぞや。今日勝利を得ることなども。頼る戦に敗さるるく。炎暑小冒され自軍憲く苦しめり。遠国をとも く推進ることも。小谷い要害堅固小して。下野守久政小強軍の会と綱安ままべ。容易落城まべうるど。新て自軍の破まとなるべし。汝謂ぞや。東西十分小満ることない災あるとこそ誠むま。今日の勝利十分

こまべ。這般勇氣ふ惰らべるまで。敵ふ今度ハ帰陣をべしと究め
るるとと宣ひしまべ。羅古帝大ふ累岡願ハ怠慢なるおしめしそ
や。東西十分なるハ災過ありとて。撃べた敵と殿もせず患と殘
る事やもある。必猪の圍ふ向まるんふ。猪ものとふ事あるべるまで。
自軍と圍ふと宣へども。敵も是ふ労ふ多ふ。なふも自軍を提
剛ふ殘事と得る。強勢あり。敵を敗軍ふ事と棄れ。懼
怖るその中へ。彼作の如た勇をもつて。驀地ふ推進らんふを。
戰まべして敵の殘氣とるまべ。ふ足ぬべし。ふ要達賢商
ふとも守將勇猛ふなれば怠慢為ふ。曾ふ
御智勇ありとハども。軍敗まべ後ふまべ。家屋して諸勢の
指揮。全るるるふてハ又久ふ強ふ多ありともよも一二十ハ過

べるまで。況敗軍ふ力と喪落して。強ふも労無ふ等しまべ。心ふ
恐怖と抱きぬまべ。速く安ハ戰ふまで。心決せぬまで不ハ直地ふ進
んで攻る响を。切力と労せべして。猪利を得ること疑ひなし。彼る必
勝の圖をまべ。空しく御帰陣しまべ。敵を悅びて陽禦の
準備。殘氣と奮ひ朝倉と謀ど合せ。諸部ハ待設なば。
容易ふ落城なるべし。今日御帰陣の恩達ハ君御一個ふを
あらざるべた。定めて動めし軍あらん。孰業なまべ。方位ふ不
祥の詞と云仕せしまで。天ふ賜とまべ。
諸國の動乱を平治ま。義民と救まんとおがしめまべ。討べき敵
を早く殺うつべるまで。敵ふ多ふ時節と待く謀せらるべ。今
是漢井ハ撃べた時ま。小谷落城つまらべ。弱倉武士ハ戰果ふ

の〻紀。越前も忽地掌を覆べし。然るに這度御帰陣あるべ。淺井朝倉の〻ものゝ〻ども。こゝ好こゝ角の倫輩まで。蜂起いさゝか長政

傾。驍便こゝに藏を揮ん。然るに胸を君一顧ゆゑして。諸方の敵を防ぐべし。然て神を巡てされ然るべきと理を謁し。道を引て諫むるも

ども。信長ときを悟り潔ど。一塔場陣を徇るゝ上ゆ今又進発の事を

言ふさへ諸卒疲労ゆゑ。暫を含む輩もあらんまゝ今度は帰

陣して四象て征伐なさべ紀ど。前陣天命ゆゑ。淺井朝倉の輩

とこの信ゆゑして弃置とも。仍量の事をう俊発さん。是能は軍を逐

さんと秀吉が詞を用ひらまゝど。惑を百こそ詮方なれ

繪本豊臣勲功記　二編卷之九終